

# 感覚表現とは何か？

清 海 節 子

## 1. はじめに

感覚表現(感覚語彙)とは、言語学で、どのような表現・語彙を指すのかについて定まった見解がないように思われる。しばしば感覚表現は、感情表現の中に含まれるとして、「感情・感覚」と一括りにされる。その理由は、感覚語彙数が限られていること、そして、語彙によっては、感情語なのか感覚語なのかを明確に区別できない場合があるからではないかと思われる。そのため、感覚表現が感情表現の一部であると考えられることもある。本稿では、感覚語彙のこれまでの扱われ方を観察しながら、問題点があるかどうかを明らかにしようとする。結論として言えることは次の2点である。第一に、感覚表現には、五感以外の感覚である深部感覚に基づく表現もあることを認識すべきである。第二は、感情語彙と感覚語彙とは、共通の傾向があるものの、異なる特徴が見つけられることから、性質上区別されるべきである。

一般に「感覚」から連想されるのは、五感(視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚)であり、この結びつきが強いので、感覚表現とは、五感表現であると考えられる傾向が強い。例えば、『大修館英語学辞典』で、「感覚」の英訳は、‘five senses’(=「五感」)となっている。『感覚表現辞典』では、五感を基本にして、視覚を4分野、聴覚を2分野、触覚を4つに分け、全部で次の12分野(光影、色彩、動き、状態、音声、音響、嗅覚、味覚、触覚、痛痒、湿度、温度)に区別している。松浦(2003)も同様に、感覚表現の語彙数を調べるために、五感を表す語彙を『分類語彙表』から選び出している<sup>1)</sup>。また、『認知言語学キーワード事典』では、「感覚表現」が扱われているのは、やはり五感を基礎とする「共感覚」の項である。

以上のように、一般に、感覚表現は五感に関連する表現と同一視される傾向があることは事実である。そのような扱い方は、正しいのであろうか。感覚表現を五感だけでなく、広がりをもたせて理解することも可能である。例えば、体の中のどこからともなく、自然にこみ上げてくるような感覚もあるはずである。そのような感覚表現は、いかに扱うべきであるのだろうか。

次の2節では、典型的な感覚語彙の一つと考えられる温度感覚語彙についての研究(国広 1967, 1981)を紹介する。3節では、従来感情語彙として考えられているが、感覚語彙の

ような要素を含んだ例(「ウレシイ」と‘happy’)を考察する。そして、4節では、感覚表現の分類について吉村(2004)を参考に五感以外の感覚について考える。次の5節は、感覚語彙と感情語彙との比較を歴史的に研究した山口(1982)を取り上げ、感覚語彙と感情語彙の類似点と相違点を確認する。最後の6節で、結論が述べられる。

## 2. 温度感覚語彙の分析(国広 1967, 1981)

五感の中の皮膚感覚に含まれる温度感覚語彙は、典型的な感覚表現の中の一つとみなされるだろう。この節では、国広(1967, 1981)の温度を表す形容詞の研究を一部紹介し、感覚語彙の特徴を考えていきたい。

国広は、「ツメタイ」「サムイ」「スズシイ」(国広は、これらを温度形容詞と呼んでいる)を日英語で比較することから、日本語の意味の差異を探っている。これらの三語を英語では、‘cold’ と ‘cool’ の二語で表す。‘Cold’ は、「ツメタイ」と「サムイ」に相当し、‘cool’ は、「ツメタイ」と「スズシイ」に対応する。しかし(1)で示されているように文脈によってその使用には、制約がある(国広 1981:26)。

- (1)     a cold cup ---「ツメタイカップ」     「\*サムイカップ」  
           cold water ---「ツメタイ水」       「\*サムイ水」  
           cold wind ---「ツメタイ風」       「サムイ風」  
           -----  
           a cool dress---「\*ツメタイドレス」   「スズシイドレス」  
           cool water--- 「ツメタイ水」       「\*スズシイ水」  
           cool breeze--- 「\*ツメタイそよ風」   「スズシイそよ風」

「\*ツメタイそよ風」が不自然になるのは、「そよ風」が熱くもなく、つめたくもないような適温で静かに吹く風を意味するからであると述べている。国広によると、「ツメタイ」と「サムイ」の相違点は、(2)のように要約できる。

- (2) 「ツメタイ」--- <体の一部分が感じる冷感>

「サムイ」----- <体温中枢が感じる冷感>

(2)の「体の一部分」とは、指先や体の表面等である。「体温中枢」については、国広の考えが述べられている部分を以下に少々長い引用する。

体温中枢は、脳の一部分である視床下部(hypothalamus)にあり、体温をつねに常温(約36度5分)に保つように働いている。いわば体内自動温度調節器のメモリが常温にセットされているのである。そこを流れる血液の温度、全身の各所から伝えられる温度情報等

の総合効果によって目盛りがマイナスの方向に刺激されるとサムイと感じ、逆にプラスの方向に刺激されるとアツイと感じるのだと説明される。熱病に病菌の出す毒素が血液にはいり込む。その刺激によって目盛りがたとえば40度まで押し上げられると、今度は、40度が常温ということになり、その温度を目指して体温は上昇を始める。これが「発熱」の現象である。体温が40度まで上昇しきらないときは、物理的には39度という高熱であっても常温よりは相対的に低いことになるので、温度感覚としてはサムイと感じる。これが「悪寒」の現象である。スズシイ感覚は、体全体の温度の低い空気が接して体表面から快い程度に熱を奪うときの感覚である。このようにこれらの温度形容詞は本質的には、主観的な感覚を指すのである。(国広 1981:26)

国広は、温度形容詞は「主観的」であると主張している点に注目すべきである。影山(1980)は、「ツメタイ」は、物自体の客観的な温度を示すと考えているが、国広は、それに異議を唱えている。例えば、同じ部屋にある毛布と金属は物理的に同じ温度であるはずなのに、手で触れると、金属は冷たく感じられるが、毛布は、暖かく感じられる。それは、物体の熱伝導度の違いから生じている現象で、「体表面から奪われる熱の量に直接支配される主観的感覚を指していることになる(国広 1981:27)」と述べている。

国広(1967: 19-20)は、温度形容詞の意義素の全体像を分かり易く(3)のように説明している。

(3)

サムイ---《常温あるいはそれ以下にある体温が不快な程度まで多量にうばわれる時の体全部の感覚(または主観的にそれと同様な感覚)》

スズシイ---《常温以上に高まった体温が快い程度にうばわれる時の体全部の感覚》

アタタカイ---

i) 体全部《体温が常温で熱が加えられもうばわれもしない時、また常温以下の時は快い程度に熱が加えられる時の感覚》

ii) 体一部《該当の体一部が常温以下である時わずかな程度の熱が伝えられる時の感覚》

アツイ(暑い)---《体温が常温かそれ以上の時不快な程度まで多量の熱が加えられる時の体全部の感覚》

ツメタイ---《体の一部から色々の程度に熱がうばわれるが、体全部には及ばない時の感覚》

ヌルイ---《該当の体一部に熱が加えられもそこからうばわれもしない時の感覚》

アツイ(熱い)---《体の一部に多量の熱が加えられるが体全部には及ばない時の感覚》

国広は、(3) で分かるように、感覚語彙としての温度形容詞を、さまざまな状況下での「体の一部」か「体全体(=体温中枢)」の感覚ととらえている。さらに、これらの形容詞は、本質的に「主観的」とであるという特徴があると考えている。しかし、筆者には、「体の一部」の感覚(=アタタカイ、ツメタイ、アツイ(熱い))は、影山の言う通り、客観性がないとは言えないと思われる。その理由は、体の一部分という、例えば手とか、顔であるとか特定できる部分での感じ方で、第三者が当事者の手や顔等を触ったりして確かめることも可能である。しかし、「体全体」の感覚は、第三者が確かめることが困難であり、主観性が極めて高いと考えられる。従って、「体の一部」と「体全体」の感覚は、主観性の度合いが違っていると仮定できるのではないだろうか。

### 3. 感情語彙か感覚語彙か？

この節では、一般に感情語彙と考えられているにもかかわらず、感覚語彙のように扱われている例を紹介する。そのような語彙の中に、日本語では「タノシイ」、英語では、‘happy’ が含まれていると考えられる。2.1では、「タノシイ」を感覚語彙とみなしている菊池(2000)の議論を紹介し、次の2.2では、‘happy’を感情語彙としながらも感覚語彙の特質があるように扱っているWierzbicka(1999)の説明を概観する。

#### 3.1 「タノシイ」(菊池 2000)

菊池(2000)は、類義語の「タノシイ」と「ウレシイ」という語彙を対比させて、それぞれの意味の本質的な特徴を(4)のように簡潔に説明している。

(4) 「ウレシイ」: <<触発された心の動き>> についての表現

「タノシイ」: <<時間の過ごし方>> についての表現

(4)から、次のような例文が適切かどうかを理解することができる。

(5) 賞金をもらってウレシカッタ。

(6) \*賞金をもらってタノシカッタ。

(7) \*賞金をもらって一杯やってウレシカッタ。

(8) 賞金をもらって一杯やってタノシカッタ。

「ウレシイ」は、<<何かに触発されて起きる感情>>を意味しているので、(5)では、賞金をもらうことから、心の動きが起きたと考えられ、「ウレシイ」が、適切な文になるが、(6)の

ように「タノシイ」では、不適切になる。ところが(7)のように、「一杯やる」という時間を過ごすことにかんしては、逆に、「ウレシイ」が、不適切で、(8)のように「タノシイ」が適切になる。

また次は、副詞であるが、同様な理由で適格性が説明できる。

(9) 贈り物をウレシク頂戴する。

(10) \*贈り物をタノシク頂戴する。

(11) \*子供とウレシク遊ぶ。

(12) 子供とタノシク遊ぶ。

(9)(10)は、贈り物をもらう時に、<<心の動き>>が起きるので、「ウレシイ」が適切になるが、(11)(12)は、子供と遊ぶという<<時間の過ごし方>>の意味があるので、「タノシイ」が適切である。

ところで、本論に関連する問題点は、菊池が、(13)のように、「ウレシイ」の意味を「感情」とする一方で、「タノシイ」の意味は「感情」ではなく、「感覚」としている点である。

(13) 「ウレシイ」：<いいこと＝自分(当該の人物)を直接に益することで、それほどは実現しやすくなく、自分ではその実現を(完全には)コントロールできないこと> が起こり、あるいはその実現が間近に迫り、それに触発されて起こる <快／喜び> の感情

「タノシイ」：時間の過ごし方について、心で<快>と受け止める感覚

従来「タノシイ」は、感情であると考えられている。(14)で分かるように、西尾(1993)と山田(1982)は、「タノシイ」を「感情」として定義している。

(14) 「タノシイ」の定義：

西尾：快を感じられることに加わって味う、持続的なみちたりた感情

山田：快と感じられる行動への能動的関与によって生じる感情

菊池が、「タノシイ」を何故「感覚」とであると定義しているかについて、「タノシイ」と「オモシロイ」を比較することで説明している。「タノシイ」と「オモシロイ」は、時間の過ごし方を問題にしているという共通の特徴を有する。しかし、「この論文、オモシロイよ」と言う場合に、「オモシロイ」は、『頭』で受け止めて評価する語で感情語彙だと考え、「タノシイ」は、『心』で<快>と感じる行為なので、「感覚」とみなしている。ここで、菊池は、『心』とは何であるかを定義していない。筆者は、菊池の『心』を「精神(＝頭)でなく、体の奥のどこか」を指すと提案したい。そうすると、「タノシイ」は、「体の奥のどこからとなく感じられる感覚」とであると解釈できる。

ところで、山口 (1982: 204) は、感覚表現の範囲は曖昧であるとはしながらも、最も典型的な形容詞として挙げている例は次の4通りである。

- (15) i) 「かゆい」「くすぐったい」など当事者以外は感じられない皮膚感覚  
 ii) 「涼しい」「暑い」など温度に対する皮膚感覚  
 iii) 「だるい」「ねむい」など体の深部から生じる感覚  
 iv) 「息苦しい」「胸苦しい」などの内臓感覚語

清海 (2006: 99) は、菊池が分析した「タノシイ」の感覚としての特徴が、山口の分類の中では、(15iii) に一番近いのではないかと述べた。つまり、「だるい」「ねむい」と「タノシイ」が関連する感覚であると捉えることになる。山口が感覚の一つとして挙げている「体の深部から生じる感覚」とは、菊池が『心で感じる』と捉えていることと類似していると推測される。従って、「体の深部」とは、『頭』(＝精神)とは対極にある場所に相当すると理解できるかもしれない。

### 3.2 ‘Happy’ (Wierzbicka 1999)

Wierzbicka (1999) の研究は、感情語彙を言語間で普遍的な概念を表現する基本的語彙だけで語彙の意味を「認知シナリオ」として説明している。詳細な説明は、ここでは省くが、Wierzbicka は、‘happy’ は、起こってほしいと思っている何か良いことが起きる時生じる感情であるとして、感情語彙の一つとして扱っている。しかし、彼女の議論に従うと、‘happy’ を感じるには、実は、「思考」が必要ではないと解釈することが可能になる<sup>2)</sup>。さらに、これに関連して、彼女は、‘happy’ が不可解な感情であるとして、(16) のような特徴がみられると指摘している。

- (16) I feel happy today, I don't know why.

「今日 ‘happy’ だと感じている。何故だか分からないけど。」

清海 (2006: 106) で、このように、理由なく ‘happy’ であると感じることは、‘happy’ が『感情』というより『感覚』に近いからではないかと指摘した。

また、‘happy’ は、「ウレシイ」と「タノシイ」に和訳される。そこで、(16) のような特徴をこれらの語彙で試してみると、(17)(18)になる。(17) の「ウレシイ」では不適切であるが、(18) の「タノシイ」は、不自然さはあるが、言えないことはないだろう。従って、「タノシイ」は、‘happy’ と同様に、理由なしに感じられる可能性がある。

- (17) \*今日うれしい。何故だか分からないけど。

- (18) (?) 今日楽しい。何故だか分からないけど。

以上の議論から、‘happy’ と「タノシイ」は感覚を表す語彙として扱われる可能性がある



ることが推測される。換言すると、これらの語彙は、体の奥のどこからともなく、また、理由なく生じる感覚を表すと考えられる。

#### 4. 感覚の分類（吉村 2004）

感覚表現として一番連想されやすいのは、共感覚表現であろう。共感覚表現の中には、「澄んだ音」「渋い色」「暖かい色」「甘い香り」等がある。これらは、感覚表現が比喩的に用いられた表現である。例えば、「澄んだ音」という場合、聴覚の「音」を表すのに、視覚の「澄んだ」と言う別の感覚の語句を借りた表現であり、これを共感覚表現と呼ぶ。

吉村（2004）は、共感覚表現を研究する際に、語彙レベルで、身体的感覚と精神的感覚を区別することが重要であると述べている。吉村は、「感覚」とは、「外界の刺激に対する心身の反応」と考え、「感覚」は、身体的（外的）であり、「感情」は、精神的（内的）である考え、それぞれの表現を次のように定義している（吉村 2004:14）。

(19) 感覚表現 --- 人間が身体的に有している五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）

を通して感じたことを言葉で表現したもの

感情表現<sup>3)</sup> --- 内的感覚として精神的に感じたことを言葉で表現したもの

(19) から明らかであるが、吉村は、感情表現を「感覚」の一部と捉え、「精神的感覚」とみなし、感覚表現とともに、感覚に含まれると考えている。そして、実際には、感覚表現と感情表現は、お互いに関連し、感覚表現で感情を表したり、感覚表現で、感情を表現することもあると述べている。

ところで、五感は、感覚表現の基本ではあるが、吉村は、五感以外にも「身体的感覚」として分類される特徴があると述べている。吉村（2004:18）によれば、身体的感覚は、(20)のように、遠覚、皮膚感覚、深部感覚の三つに大きく分類される（下線は五感を指す）。

(20)

i) 遠覚(遠感覚): 視覚 聴覚

ii) 皮膚感覚(近接感覚): 触覚(広義では、触・圧覚[機械的感覚]、温・冷覚[温度感覚]、痛覚[侵害感覚]、振動覚、重量感覚を含む)  
味覚 嗅覚

iii) 深部感覚: 運動感覚、平衡感覚、内臓感覚(有機感覚、臓器感覚、自家感覚、  
内臓痛覚とも呼ばれる)、位置感覚、筋肉感覚など

(20ii) と (20iii) は、一括りで「体性感覚」(= 'somatic sensation') と呼ばれる。また、(20i) が「高度感覚」、それに対して、(20ii) と (20iii) が「初等(下等)感覚」と分類されることもある。

吉川は、五感だけでなく、「体性感覚」(皮膚感覚と深部感覚)も人類すべてに共通する身体的感覚であると述べている。吉村の説明で、われわれが注目すべき特徴は、五感という連想から一番離れている(20iii)「深部感覚」ではないだろうか。これは、山口(1982)の分類で、(15iii)(=だるい、ねむい)と、(15iv)(=息苦しい、胸苦しい)に相当すると考えられる。また、「楽しい」や‘happy’とも関連する。「深部感覚」に含まれる運動感覚、平衡感覚等、それぞれの感覚に対応する語彙があるかないかは明確ではないが、筆者が1節の終わりに疑問を出したように、体のどことなく、沸き上がってくるような感覚があることを忘れてはいけないと思われる。この種の感覚は、(20i) (20ii)のような具体的で捉え易い感覚(=視覚、聴覚、触覚など)とは性質的に異なっていると考えられるであろう。「深部」という名称からも想像に難くないが、いまだ精神的な性質にまで昇華されていない未分化で、頭の中ではなく、体の中で、なんとなく感じられることを指すと理解しよう。そうすると、筆者には、「皮膚感覚と深部感覚」を、「遠覚」(視覚、聴覚)と対立した感覚として捉えるより、「深部感覚」を独立した存在として考える方が、言語学的には、有益であると思われる。

そこで、提案として言えることは、感覚表現を、「五感」と「深部感覚」から成る表現だと考えることである。その理由は、第一に、五感は、「遠覚」(視覚、聴覚)と「皮膚感覚」(触覚、味覚、嗅覚)に含まれ、それ以外の感覚は、「深部感覚」として分類されていることが挙げられる。第二に、「深部感覚」は、「五感」と決定的に異なる性質があるからである。それは、「五感」の中に、高等なものと下等なものがあるにせよ、すべて体の表面を通して感じられる感覚であるが、「深部感覚」は、体のどの部分とは特定できなく、体のどこかに存在すると言った曖昧な性質のもので、客観的に説明し難い感覚である。この種の感覚は、五感とは違って、つかみどころがない故に、これまで、あまり注目されていない。

## 5. 感覚語彙の特徴 (山口 1982)

山口(1982)は、感覚語彙と感情語彙を歴史的観点から考察している。これまでに多くの感情語や感覚語の研究はあったものの、語彙が限られ、個別的で総合的なものはなかった。そこで、山口は全体的な感覚・感情語彙に於ける意味の推移傾向に取り組んだ。総合的観点から調査したという点で、彼女の研究は高く評価できる。本稿では、山口の感覚語彙の部分に焦点を当てるが、感情語彙と比較して議論を進めているため、必要に応じて、感情語彙についても簡潔に説明をする。

山口は、感情語彙と感覚語彙との関連で、興味深い共通する傾向があることを二つの視点から指摘している。一つは、感覚語彙から感情語彙への意味の推移であり、二つ目



は、快・不快語彙の割合についてである。その一方で、意味変化に関しては、感情語彙と感覚語彙では、異なる特徴がみられる。これらの特徴を詳しく知る前に、5.1では、山口の扱う感覚語彙の定義が説明される。次の5.2では、感覚語彙と感情語彙間での意味の転化を扱い、5.3では、語彙の意味の「快」と「不快」の割合、そして、5.4では、感覚語彙と感情語彙の相違点について見ることにする。

## 5.1 感覚語彙の定義

山口の研究で注目すべき点は、感覚語彙と感情語彙それぞれの語彙の範囲を限定していることである。もっともその範囲は曖昧であると断っているが、品詞を形容詞だけにして、語彙を典型的なものとし、『分類語彙表』<sup>4)</sup>から抽出している。使用頻度が高い語彙、その他基本語彙が扱われている。「感覚語彙」の定義は (21) として提案されている。

(21) 「感覚語彙」--- 特定の個人にのみ感じられる主観的な感覚そのものを表す語

(21) から分かるように、山口は、感覚を通して認識された外界の事物の性質や状態そのものを表す語彙(「白い」「けたたましい」「生ぐさい」「辛い」「柔らか」等)は除外している。つまり、山口は、「感覚」を特定の個人が、対象ではなく、自分自身にかんじて感じる語彙だけに制限している。このように、状態語と感覚語は、(22) で示されているように対立している。

(22) 「感覚語」----- 主観的な感覚そのもの

「状態語 (属性語)」--- 対象自身にそなわる性質・状態

しかし、これら二つのどちらであるかを判別し難いこともあり、その基準として、(23) のような西尾 (1972) の提唱する主語制限を参考にしている。

(23) i) 「人」を主語に取りうること

ii) 言い切りの平叙文で表現者しか主語になり得ないこと

(23ii) は、「わたしは、だるい」と言えるが「\*あなた(この人)はだるい」は不自然になるという例が考えられる。

山口は『分類語彙表』から彼女の感覚語彙の基準に見合う現代語の典型的な形容詞を抽出した。次の28語である。

- (24) あたたかい    あつい    あつくるしい    いきぐるしい    いたい  
うすらさむい    おもくるしい    かゆい    くすぐったい    くるしい  
けむい    こそばゆい    さむい    すずしい    だるい    つめたい  
ねぐるしい    ねむい    ねむたい    はださむい    ひだるい  
ひもじい    まばゆい    まぶしい    むしあつい    むずがゆい  
むなぐるしい

この28語の中に、3節で紹介した菊地(2000)が「感覚」であると主張している「楽しい」が含まれていないことに注目しよう。また筆者には、「ひだるい」が現代語で典型的な形容詞とは思えない。

次に、山口 (1982:207) は、感覚語彙と感情語彙の相違点について次のように説明している。

感覚語彙と感情語彙とは、当事者だけの主観的な感じを表す点で、共通した性質をもっている。しかし、次のような差異点もある。すなわち、感覚語は、刺激に対する生理的な反応をあらわし、直接的、具体的な性質をもつのに対し、感情語は、刺激に対する精神的反応をあらわし、間接的、抽象的な性質をもつ。それは、感覚反応が生物的であり一時的であるのに対し、精神反応の方が、人間的であり、二次的であるのに呼応している。

山口の考えを要約すると、反応に対して、生理的性質を表現するのが「感覚語」で、精神的なものを伝えるのが「感情語」であると言えるだろう。

## 5.2 感覚語彙から感情語彙への転化

感覚語と感情語は、主観性という性質を共有しているためか、感覚語彙のいくつかは感情も表すと指摘する。より具体的な感覚の意味で、抽象的な感情の意味を比喩的に表すようになったと考えられる。搔痒感を表す語の「かゆい」「こそばゆい」「くすぐったい」「むずがゆい」があるが、一番新しい語の「むずがゆい」以外の語は、後世に、『照れくささ、きまり悪さ、物足りなさ』をも表すようになった。例えば、「かゆい」は、奈良時代から「かゆい感覚」を表現するために使用されているが、江戸時代になると、「思うようにならない、物足りない気持ち」をも表すようになった。この推移として山口は、搔痒感が「痛さ」に至らない中途半端な感覚であるために、「物足りなさ」や、「きまり悪さ」といった中途半端な感情を喩えるようになったと推測している。さらに他の感覚語である「痛い」「苦しい」「まばゆい」「まぶしい」「けむたい」も感情を意味する。その中で、平安時代から文献

で見つけられる「まばゆい」は、「強い光が目を刺激してまともにみられない時の感覚」であるが、感情として、「気後れがして、まともに顔をあげて見ていられないと言う恥の気持ち」まで意味するようになっている。

また、逆に感情語から感覚語への転化はほとんどないという。これは、抽象的な語の意味で、直接的な感覚を表すことになり、比喩としては無理があるからであろう。

### 5.3 「快・不快」語彙の割合

感覚語彙と感情語彙のそれぞれが、各時代に表す意味で、「不快」の割合が、「快」より多いという傾向がある。まず、山口は、感情・感覚語の意味を「快・不快」という観点から三つに分類している。

(25) (i) 不快な感覚・感情と認められる語---「痛い」「悲しい」

(ii) 快い感覚・感情と認められる語---「つめたい」「うれしい」

(iii) 快・不快のいずれとも決められない語---「くすぐったい」「待ち遠しい」

感覚語彙に限ると、山口の分類は、(26) のようになる。

(26)

快い感覚：

あたたかい すずしい

快・不快どちらとも決められない感覚：

こそばゆい つめたい まばゆい まぶしい

不快な感覚：

あつい あつくるしい いきぐるしい いたい うすらさむい

おもくるしい かゆい くすぐったい くるしい けむい けむたい

さむい だるい ねぐるしい ねむい ねむたい はださむい ひだるい

ひもじい ひもじい むしあつい むずがゆい むなぐるしい

さらに、山口によると、現代語での感覚語彙・感情語彙に於ける「快・不快」の比較は、表1に見られる通り、両語彙とも「不快」を表す方が多いのが分かる (1982:211)。

表1 感覚語彙・感情語彙に於ける「快・不快」の数

快・不快の別	感覚語彙	感情語彙	合計
不快と認められる語	21	64	85
快いと認められる語	2	20	22
快・不快のいずれかとも決められない	5	11	16
計	28	95	123

「不快」の割合が多いという傾向は、現代だけでなく、歴史的にも観察される。山口は、『時代別国語大辞典上代編』『源氏物語大成』『日葡辞書』で、上代、中古、中世の感覚語の用例を表2のように示している(1982:211)<sup>5)</sup>。

表2 感覚語彙の各時代に於ける「快・不快」の数

快・不快の別	上代	中古	中世
不快と認められる語	10	8	13
快いと認められる語	2	1	2
快・不快のいずれかとも決められない	1	1	4
計	13	10	9

山口は、各時代を通して不快な感覚や感情を表す語彙の方が快いものより多い理由として、人間には、多くの欲望があるが、現実には、様々な条件で満たされず、不快感を持ちやすいという人間本来のあり方に根ざすと結論づけている。

#### 5.4 感覚語彙と感情語彙の相違点

興味深いことに、感覚語彙は、感情語彙と似た性質を呈している一方で、異なる特性が認められる。それは、感覚語彙は、意味変化しにくいのに対して、感情語彙は、意味が変わりやすい点である。驚くべき事実として、山口によると、現代語の感覚語彙(28種)は、発生当時からの意味を現在まで100% 保持しているという。用法が少々変化した語彙(「寒い」「涼しい」「冷たい」)もあるが、意味の核は変化していない<sup>6)</sup>。これに対して感情語彙は、意味変化しやすく、誕生してから現在まで意味が変わっていないものは、66%である<sup>7)</sup>。

山口(1982: 214)は、感覚語彙が文献に出始めた時期を調査し、語彙として成立した時代を、表3のように推測している(語形は現代語の形にしてある)。

表3 感覚語彙が成立したと推測される時代

上代	中古	中世	近世	近代
いたい かゆい	つめたい けむたい	ひだるい	おもくるしい	むずがゆい
くるしい あたたかい	まばゆい	ひもじい	むなぐるしい	いきぐるしい
あつい さむい	あつくるしい	ねむい	ねぐるしい	けむい
すずしい だるい		こそばゆい	くすぐったい	うすらさむい
はだぎむい			むしあつい	まぶしい

表3から分かるように、基本的な感覚語彙が上代(=奈良時代)に発生し、また「はだぎむい」という複合語も成立しているのは、留意すべきであろう。

さらに、感覚語彙は、感情語彙に比べて、残存率が高い特色もあることも指摘されている。山口は、『時代別国語大辞典上代編』でみつけれられる語彙を調査し、感覚語彙は、76%、感情語彙は、49%が現在まで残っていると述べている。この結果から、感覚語彙の方が永続性があると主張している。筆者には、残存率が高いという特徴がみられるのは、語数と関係があるのではないかと思われる。山口の扱っている上代の感覚語彙が全部で13、感情語彙が85である。感覚語彙数が、感情語彙数の6分の1以下であることが、比較する際に何らかの影響を及ぼしているのではないかと想像される。

## 5.5 まとめ

感覚語彙と感情語彙を歴史的に比較した山口(1982)の研究から、共通点と相違点が明らかになった。まず、共通点として、感覚語彙から感情語彙への意味転化が挙げられる。具体的には、「こそばゆい」「まぶしい」等のように、感覚語の中には、感情を表すようになった語彙もある。また、感覚語彙・感情語彙に於ける「快・不快」の割合は、両語彙ともに、「不快」を表す方が多いことが分かった。相違点は、感覚語彙が感情語彙に比べて、意味が変化しにくく、さらに、残存率も多いという特色が見られることである。このように、感覚語彙と感情語彙は、異なる性質もみられることから、区別されるべきで、感覚表現を感情表現の一部と捉えることは正しいとは言えないだろう。

## 6. 結論

本稿は、「感覚表現(語彙)」の言語学での扱われ方について考察した。2節では、温度感覚語彙についての研究(国広 1967, 1981)を紹介した。3節では、従来感情語彙として考えられているが、感覚語彙の要素が認められる語彙、「ウレシイ」と‘happy’について、菊地(2000)とWierzbicka(1999)の分析を考察した。そして、4節では、感覚表現の分類について、吉村(2004)の説明を基に、感覚表現は、「五感」と体の奥から感じられる「深部感覚」から成り立つ表現として考えられると提案した。5節は、山口(1982)を取り上げ、感覚語彙と感情語彙の歴史的比較から、感覚語彙と感情語彙の間には、類似点もあるが、意味変化に於いては、異なる性質が認められた。

結論は、次の2点にまとめられる。第一に、感覚表現は、五感に関連する表現だと一般に考えられる傾向にあるが、実際には、五感だけでなく、それ以外の感覚(=深部感覚)に基づく表現があることを認識するべきである。例えば、「楽しい」や、‘happy’は、そのような表現に関係していると推測できる。第二に、感情語彙と感覚語彙は、性質上異なると考えられるので、区別して扱われるべきであり、感覚表現を感情表現の一部としてみなすことは避けられなければならない。



## 註

- 1) 松浦 (2003) は、一定の傾向として、視覚、聴覚、触覚に比べて、嗅覚と味覚の語彙数が極端に少ないと述べている。具体的には、『分類語彙表』の項で、視覚は、[光]と[色]、聴覚は[音]、味覚は[味]、嗅覚は[におい]、触覚は[材質]、[水分]と[気象]の項に相当するものと考え、それぞれの語数の合計は、視覚が124語、聴覚が183語、嗅覚が15語、味覚が30語、触覚146語である。
- 2) 詳細は、清海 (2006) を参照のこと。
- 3) 吉村 (2004:58) は、感情表現は喜怒哀楽などの主観的な心理現象を表すと考えている一方で、「感情には、喜び・悲しみ・恐れ・怒りなどの一時的感情の他に、苦痛・嫌悪・恐怖・驚きなどを表す感覚的感情もある」と述べている。「感覚的感情」の定義については言及していないため、明確ではないが、吉村は、感覚と感情両方の要素を含む語彙があることを示唆していると考えられる。
- 4) 山口が使用した『分類語彙表』は、国立国語研究所資料集6 (1964 秀英出版) である。
- 5) 感情語彙についても同様に、不快と認められる語の方が多い。山口(1982:211)は、感情語彙の用例についても表で示している。
- 6) 本稿の2節でも扱っているが、現在の用法では、「寒い」「涼しい」系と、「冷たい」系とに区別している。「寒い」「涼しい」は、気温等、直接に接触しないで感じる低温を表す一方で、「冷たい」は、液体や固体などを直接に触って感じる低温を意味する。ところが、奈良・平安時代では、現在の用法の区別がなく、現在の「冷たい」と言うところを「寒い」や、「涼しい」と言えた。また、気温を感じる時に、「冷たい」を使用できた。
- 7) 山口(1982:217) は、感覚語彙が意味変化しないのに比べ、感情語彙は意味変化しやすい理由を二つ挙げている。第一に、感覚語彙は、基本的な語彙しかなく、語と語の間の意味の差があるが、感情語彙は、差が微妙で、意味を混同しやすいために意味変化しやすい。第二に、感覚語彙は、語と指し示す意味との関係が具体的であるので、変化しにくい。一方、感情語彙は語と指し示す意味との関係が抽象的であるので、曖昧になりやすく、変わりやすい。

## 参考文献

- 影山太郎 1980. 『日英比較 語彙の構造』 松柏社.
- 菊地康人 2000. 「タノシイとウレシイ」『日本語:意味と文法の風景』(国広哲弥教授古稀記念論文集) ひつじ書房、143-159.
- 清海節子 2006. 「感情表現の日英比較」『駿河台大学論叢』 91-114.

- 国広哲弥 1967 (1976<sup>3</sup>). 『構造的意味論』 三省堂.
- 国広哲弥(編) 1981 (1994<sup>6</sup>). 『意味と語彙』(日英語比較講座 第3巻) 大修館.
- 西尾寅弥 1972. 『形容詞の意味用法の記述的研究』 秀英出版.
- 西尾寅弥 1993. 「喜び・楽しみのことば」 『日本語学』 12:14-22.
- 松浦照子 2003. 「感覚表現と感情」 『日本語学』 22:46-54.
- 山口仲美 1982. 「感覚・感情語彙の歴史」 『講座日本語学4:語彙史』 明治書院、202-227.
- 山田 進 1982 (1992<sup>8</sup>). 「ウレシイ・タノシイ」 國廣哲弥(編)『ことばの意味3－辞書に書いてないこと』 平凡社、112-120.
- 吉村耕治(編) 2004. 『英語の感覚と表現』 三修社.
- Wierzbicka, Anna. 1999. *Emotions across Languages and Cultures: Diversity and Universals*. New York/Oxford: Oxford University Press.

**辞典:**

- 『大修館英語学辞典』 松浪有 他(編) 1986 (1983). 大修館.
- 『感覚表現辞典』 中村明(編) 1995 (1998). 東京堂出版.
- 『認知言語学キーワード事典』 辻幸夫(編) 2002. 研究社.